

学び舎、はじめて物語

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

そもそも学校と呼べるものが出現したのはいつ頃からだろう。室町期の足利学校（国史跡・日本遺産）や江戸期の岡山藩閑谷学校（国史跡・国宝）など、名称としての学校は古くから使われているが、教育制度としての「学校」が整うのはやはり近代になってから。その辺りの学び舎の変遷史、愛媛事情を県内で拾ってみよう。

江戸期の伊予八藩にはそれぞれ藩校があり、現存する代表例では松山藩校として文政十一（1828）年に設立の明教館がある。近代となつて明治三年、県内他藩に先駆けて洋典科が設けられ、英学校の設置をみた事は着目に値する。同十一年には松山中学となり、しばらくして正岡子規も入学、その後はそうした有為の人材を多数輩出することとなり講堂内には彼らの肖像画がその三方に掛けられていて圧巻。



明教館内部、支輪天井がその格式を物語る

この建物は昭和十二年に現在地へ移築されたが、同二十年の数度にわたる松山空襲を考えると、このジャンルの遺構としてよくぞ残つたと言わねばならない。

さて、江戸期で現存する学び舎には、幕末期にひと際光芒を放つた建物が大洲にある八幡神社の私塾古学堂である。主宰する神官常磐井巖戈（いかしほこ）、彼と義兄弟の契りを結ぶ国学者矢野玄道、または天才語学者三瀬諸淵、悲運の志士巢内式部、岩倉具視の懐刀となる香渡晋（こうどすずむ）、後に五稜郭の設計者となる武田斐三郎、三輪田米山（書家）・元網（勤皇

家）兄弟などなど、枚挙にいとまがない。何れもこの小さき学び舎から巣立ち、幕末から明治にかけての激動期に異彩を放つ活躍をしている。容れ物の大きさと中身の教育は関係ないのだろう、それよりも大事なのは教える側と学ぶ側の真剣度であり、そうした時代の持つ熱なのかも知れない。藩校とは違って身分を問わないその受け入れもあつて、建物の土台となる石垣に棒杭を刺して足掛かりとし、出格子に掴まつて受講する者が居たほどの人気があつたらしい。一人でこの建物を守っておられた常磐井忠香氏から、平



古学堂、手前が書庫